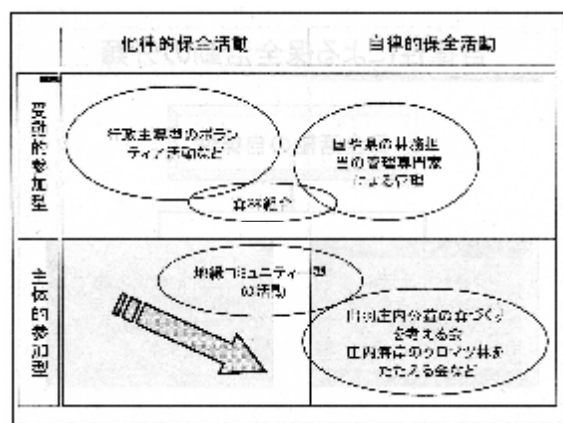
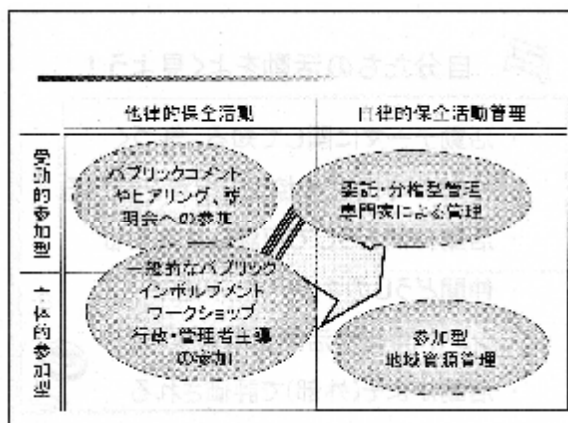


人に任せて、誰かに「指導されて」やる、それに従っているだけの保全と、自分達で考えてやる保全では、結果は同じでも「内容」には大きな違いが出ます。なぜかという、勉強と一緒にです。人に言われていやいやながらやったものは身につくませんが、自分で考えた勉強は、感覚的に身につけて、自分も人に伝えられるようになっていくのです。ですから同じ活動でも、自律的でない活動は次に引き継いでいくことができません。

これをわかりやすく説明したいと思います。行政がよく用意するパブリックコメントやヒアリング・説明会です。例えば、開発計画がある場合、住民に「説明会をしますので参加してください」という呼びかけがあります。この場合参加者は、残念ながら「受動的参加」になりやすい。動員されしかたなくということです。もちろん、パブリックコメントや説明会は行政が「用意」しますから、他力的な活動となります。いやいやながら、参加していることとなります。

もう1つ、主体的、能動的に参加する場合です。自分から行く、自分たちの意見を言う、自分の意見を持ってワークショップを行う場合です。しかしこのケースでも、それを催したのは実際は行政で、これも結局、他力的な保全活動で、主体的な活動ではないといえます。

それならば、自分達で専門家を呼んでやればいいのかということになります。クロマツ林の専門家に任せればいいのかと、私たちがあえて参加する必要はない。これは、自律的にやっているように見えますが、実は管理を専門家に任せるだけで、受動的に参加するだけです。その結果、専門家は賢くなっても、参加者は学ぶことはあまりないわけです。



では、どうすればいいのでしょうか。みなさんが参加することで地域のクロマツ林をなんとか維持できるならば、メリットは勉強と一緒に非常に大きいので、結果的に専門家にまかせずに、みなさんが能動的・主体的に参加して管理する方がメリットが大きいかもしれないということです。実際のみなさんのクロマツ林の保全活動を見ますとこれがよく解ります。まずボランティア活動

への参加ですが、これは「集まってください、なんとかなりますから」というものです。それから、先ほどご報告いただいた森林組合の方は、ある意味では専門家ですが、森林組合という制度で仕事を進めているということで、図の左の真ん中ほどにきます。それから地域コミュニティでクロマツ林を保全しようという場合には、活動は主体的ですが、割り当てがあつたりして、かなり他力的ですので、図の左下です。一方、国や県の専門家・林業担当者は技術がありますし、専門家ですから、図の右上です。そして、最後の右下に来ているものが、こちらの「森づくりを考える会」や「たたえる会」の活動だと思います。

さてみなさん、この図のように、右のほうへ段々ステップアップしていく大きな流れがあればいいのではないのでしょうか。もちろん最初から右下の高いレベルの活動を積極的にすることはできません。最初は左の上からはじめても、面白いと分かれば次のステップアップに行こうという大きな流れが庄内の活動にはあると私は思います。

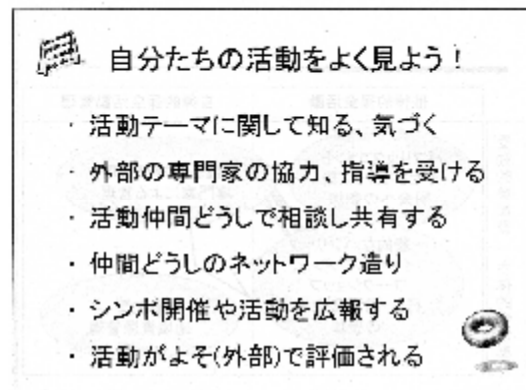
次に環境保全活動の大きな流れについてお話します。環境保全活動というのは、いろんなステージを持っています。ここに共通する要素の流れと書いてありますが、実は活動には「大きな流れ」があります。

まず最初に起きるのは、「クロマツ林の保全について気付く」ことです。庄内のクロマツ林の保全活動では、雪害で倒れたり、折れたりしたクロマツを見て「クロマツ林の現状は放っておいておけない」と保全の重要性に気づいた方が現れました。気がついた人たちは、自分たちだけではなかなか進まないで、ネットワークをつくりました。それから、活動を進める際に専門家の指導を受ける。

これは、例えば林業関係者やクロマツ林管理の専門家の指導を受けることです。それから保全活動では相談が必要です。そして実際にクロマツ林に入って保全活動をする。次に、活動が進むと、先程の方が「新聞に載ったよ」と紹介されていますが、自分たちでやったシンポジウムや活動がメディアで紹介されます。それは威張っているわけではなく、「こういう活動をやっているの、みなさん参加しませんか」というメッセージなのです。それが外に伝わると、「あそこ、よくやっているな」、「あそこのクロマツ林保全活動は、参加した人たちがみんな気持ち良かったと言っているよ」とだんだん評価が高まります。こうして活動が評価されると、世の中にはおせっかいな人が必ずいますから、「私も参加してみようじゃないか」と言うことで仲間が増えるのです。

私はクロマツ林保全の活動を例にお話していますが、地域活動とか町内会活動など、およそ活動と名のつくものは、このような特徴の経緯を持っているはずです。例えば、PTA活動を例にとれば、教育問題、子供のいじめの問題について会議を開く、それから専門家のお話を聞いてみよう、専門家の指導を受けてみよう、PTAのメンバーで相談をしてみよう。他のPTAとネットワークを築いてみようとかいう動きがあります。

以上のことを分かりやすく図に描くと、この「8の字の図（サーキットモデル）」になります。①番から順番に見ていただきたいのですが、①では、クロマツ林に関して地域の方や専門家が気づいてなんとかしようと思ひを出し合うステージです。個々に活動していたその人たちが結びついて行くのが②です。個人個人の活動ではできなかったことも、「個の力」をうまく結びつけると実現できます。そして、このシンポジウムのように具体的な「形」や「成果」として③で実現します。実現した成果が新聞等に紹介されると、「クロマツ林の保全活動とはこういうことか、私達のすぐ近くですばらしい保全活動が行われている」と評価されます。これが④です。そうすると、「じゃあ私も頑張ってみようか」という人が必ず出てきて参加者が増えるのです。図では①のところに戻



自分たちの活動をよく見よう!

- ・ 活動テーマに関して知る、気づく
- ・ 外部の専門家の協力、指導を受ける
- ・ 活動仲間どうして相談し共有する
- ・ 仲間どうしのネットワーク作り
- ・ シンボ開催や活動を広報する
- ・ 活動がよそ(外部)で評価される

クロマツ林保全活動も、このサイクルを取り入れることができれば、次々に新しいメンバーが参加して活動を活性化できるでしょう。ここで、ポイントになることは2つあります。1つは「結び付ける」ということです。活動の中では、まだ結びついていない人がいっぱいいます。そこで、結び付ける人がいると活動の「成果」につながりやすい。せっかくいい人がいるのに、結び付ける人がいないと、活動は結果に結びつかない。結び付ける人は重要です。

クロマツ林保全では、おそらく梅津勘一さんがその役割を担っていると思います。この結び付ける人の持つ特徴は「多芸多才」ということです。私もいろいろ活動する人を見てきましたが、このような立場にある人は非常に芸達者です。梅津さんは公務員ですが、「歌って踊れる公務員」です。そういう人が、各地でキーパーソン・結び付け屋になるのです。公務員しかできない人、「私は役人しかできません」という人は、残念ながら結び付け屋にはなれません。

また梅津さんの場合、クロマツ林保全と結びつかない自分の趣味のメンバーをクロマツ林の保全活動に上手に誘導し、参加させています。ここからわかることは、「環境保全しかできない人」は実際には「環境保全活動にあまり役立たない」ということです。ご自分が「環境保全活動しかできない」と思う人は少し考え直してみてください。ご自分の趣味の仲間を環境保全活動に組み入れるくらいのことできないといけないのです。

活動を評価する4つの分野	
←活動の外部	活動の内部→
④ 外部の評価は得られているか？	② メンバーのネットワークは充実してきているか？
③ 具体的な成果(形)は出ているか？	① 新しい仲間は増えたか？

次に、クロマツ林保全活動を評価してみます。どのように評価するのかといいますと、この表のように、先ほどのサーキットモデルの4つのステージを利用し、それぞれを指標として使います。

まず、1のところは、どれだけ「お店が開いている」か、というところ。これはつまり「新しいメンバーがどれだけ入ったか」という指標です。活動に新しいメンバーが入ったということは、違った考えや知識が入ってきて活動がダイナミックになるということ、「持ち駒が増える」ということです。

次に2は、どれだけ「ネットワーク」を作れたかという指標です。1でいい人がたくさん参加しても、それぞれが孤立しては活動は盛り上がりません。つまり仲間同士の「ネットワークの構築」がポイントです。

さらに3は、「具体的な成果を出しているか」という指標です。いくらいい人が参加してきて、いくらネットワークを構築しても、実際の「活動成果がゼロ」で、仲間内の会議しかなかったのでは、だめです。具体的な成果がどれだけ生み出したかという指標が3です。

最後に4は「どのように評価されたか」という指標です。いくらいい活動をして、みなさんに伝わらなかつたら、次のいい人が参加してきてくれません。活動の成果の広報、PR がどれだけで

きたかがポイントです。

この1と2はみなさんの「活動の内部」です。しかし3と4はみなさんの「活動の外部」です。ですから、環境保全活動を連続してレベルアップしていきたくれば、「身内」や「仲間内」だけで仲良くしているだけではだめで、常に自分たちの活動の外部、つまり「外の目を意識する」ようにしなければならぬのです。


さて、これは、「クロマツ林をたたえる会」の活動記録です。このように活動記録がきちんと整理されているのは優れた団体ですね。その団体が組織としてうまく機能していることを示すものだと思います。これを見れば1年間の活動が一目瞭然ですね。



上から見てみると、この顔合わせ会、これは、外の団体とのお付き合いですね。それで、これは4に当たります。2番目以降の活動も順番に、仲間内の会合(活動)か、外向けの活動かを見ていくと、どちらに比重をおいている1年間かがわかります。例えば「1と2の活動が多くて、3の実際の成果が少ないな」とか、だから「来年は実際の保全活動に力をいれよう」などとチェックすることができます。また活動のメンバー表を見て、「どうも新しい人が入ってこない」となれば、「外部への発信やPRが足りないのではないか」という反省も出てきます。このような4つのステージのバランスがとれていれば、会はレベルアップしていきます。

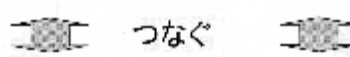
活動の停滞を感じたら

- 内部へ集中していないか？
- ネットワーキングに偏っていないか？
- 表現した成果はわかりやすいか？
- 新たなメンバー「よそ者」探し



2つの活動のバランス

- 活動で「仲良く手をつなぐ」活動
- 交流や学習、ネットワーキングを目的
- 「目に見える形をつくる」活動
- 具体的に成果や形を創り出す



また活動がうまくいかない場合は、「活動が内向きになっていないか」チェックすればいいと思います。自分達だけの「内部向けの活動」でなく、活動が外に向かっていているかを確認して下さい。ともすれば、保全活動でも、「メンバーが仲良くすること」にエネルギーを使い果たし、外部への発信がされなくなります。また外に向かって発信しているけれども、「難しすぎる活動をやって、専門用語ばかり使っていないか」は要注意です。会の発行する新聞・雑誌、今日の会のようなシンポジウムが、保全活動に熱心なあまり「難しい言葉」の固まりになっていないかを意識していないと、外部の評価は得られません。

そして仲間で仲良くする「親睦的な活動」は会を維持するためには必要ですが、一方で成果を出す活動も重要です。この成果とは、簡単に言えばクロマツ林の保全活動や今日のクロマツシンポジウム、会です印刷物や報告書なのです。こちらの会では、第1回からシンポジウムの結果をきちんと取りまとめています。こういう取りまとめはみんないやがる活動で、仲間で仲良くやっている中では、「あんたがやってくれよ」とは言いにくい。しかし言わなくてははいけません。両方をやらないと、活動というのは盛り上がっていかないのであります。

また逆に、活動では「成果が重要」ということで、あれもこれもとやり始めると仲間との関係がぎくしゃくしてしまいます。だから、会の運営はバランスが大事です。これは、環境保全活動だけ